

エクスタシー [èkstesi]

人間はその限界のなかで可能なことしかできない。

不可能を可能にし、限界を突き破ることはできる。しかし人間はその限界のなかでしかそのなにかをなすことはできない。

たとえば『眼』を超えることはできない。それを意識と呼んでも魂と呼んでもよい、いずれにせよ、僕らにはそれをたしかめることも分析することもできやしないのだから。既にそのなかについて当事者ではないから、鮭の産卵を観察して知識にするようなわけにはいかないのである。僕らにはそれがどういう事態であるのかを観測することができない。僕らは認識という名の下にながら起こっているのか、それがなんであるかを知りようがない。認識にはさまざまな限界があり、事実を見ることも真実を知ることその範囲内ではない。

そんなわけで僕は朝起きるとエスプレッソ・マシンのスイッチを入れる。磨き上げられたステンレスのボディに自分自身が映るのを眺める。まぶたがいく重にもなっているのがわかる。顔を洗い、髪をブラシで後ろへ梳かす。鏡のなかのパジャマ姿。それが僕なのだが、なんでもないことだ。パジャマというのはパンジャブ地方の民族服の名称に由来する名詞であるらしい。いまだではもうそんなの関係ない。そんなふうになにもかもが忘れられていくのだろっ。

などという感傷的な言葉をならべるといかにもアーティスティックな気分になってくる。だが甘っちょろい喪失の時代は終わった。再び現実主義と行動との時代が来る。幸福なればこそ人はセンチメンタルな曲を聴きたがる。ほんとうに苦しいときに哀しい楽曲は聴かない。どのような言葉もメロディも実存する自分の苦しみに追いつけないからである。聴く気になんかなるものか。

そして真に切迫する刹那には実効性のあるものしか求められない。渴きを癒す水、寒さを凌ぐ毛布、いまを切り抜ける具体的な手段、その瞬間にはそれしか考えない。

だがこれも一般論にすぎない。すべては限界付きでしかない。

オクスフォード・マーマレードとヒースの花の蜜のみで作られた蜂蜜を塗って食す。雨だった。シルク・シャツに袖をおし、小抽斗からカフスとボタンとをえらびだし、ルイ王家の紋のような柄入りの紋織タイを締める。

ネクタイ・ピンのままで熟慮し、クローゼットからつかんだスーツをはおり、スウェイン・エドニー・ブリッグ&サンズ製の傘を持った。

高卒で事務機器販売会社に三ヶ月間勤務をしていたが、一週間まえに辞めた。親戚の紹介だったので以来、親とは口を利いていない。それでも相変わらず同居している。

こうやって毎日、出社のように家をでていた。もつともシルク・シャツで会社に行く奴は少ない。

いつもの繰り返しだ。

まず駅前から電車に乗る。

どこか喫茶店で席に着くとテーブルに携帯電話をおき、間断なく連絡が入る人のように構え、コーヒーを啜ってはキッド革で装丁されたノートを開き、時間をつぶし、天気が良ければ公園で多忙のあいまのようにサンドイッチをつまむ。毎日そうしている。

午前九時三〇分。窓側の席に深く坐った。

マイルス・デビスが流れている。

雨の街はけづっていた。

降雨を眺めているうちに高校時代に付き合っていた夕美を思い出す。なぜ別れたのかはよくわからない。彼女からいいたのだ。僕はうなずいた。それではいけないのかかもしれないが、そのときなが必要だったのかは後でしかわからない。僕は外にでずにいられなくなる。叔父から就職祝いにもらったチャーチのモンク・シューにはミンク・オイルが重ねて塗布してあるのだ。

人々が用件にひたむきに俯いて傘を差すなかをただ歩く。

気が附くと電化製品量販店のまえにたち止まっていた。店頭には軒から垂らした大きい透明のビニールがあり、液晶の大型テレビがならべられている。画面に映っているのはアクロポリス、白く切りたつ岩の丘のうえのアテナ・パルテノスに捧げられたパルテノン神殿であった。僕は蒼穹に目を奪われている。

処女アテナ。^{パラス}智慧と戦との女神には北方系説と南方伝来説とがある。

ペラスゴイ人の伝承によれば彼女はリビアのトリートニス湖畔で生まれ、クレタ島に渡り、ギリシアのトリートン河畔に住んだという。

実際リビア人は紀元前四〇〇〇年ころからクレタに移住しはじめており、南北エジプトが合併したエジプト第二王朝時代（紀元前二〇〇〇年ころ）、盛んにナイルのデルタからクレタへ逃れている。

その後ミノア王朝を介してギリシアに伝来したと考えれば筋がとおるのだ。

僕はこのことを想うとき、このギリシアふうの鼻筋と顎とを持った女神が褐色の膚と強くふち取られた双眸、弓形の眉をしていたと想像し、愉しむ。

たしかに美しかったに違いない。

画材屋に寄つてからすぐに帰宅し、翌日以降ほとんど外出しなかった。

僕はリビアのアテナ像を造りはじめたのである。といってもリビア人の正確なイメージはない。カダフィ大佐の顔しか思い浮かばない。なんの根拠もなくエジプトのネフェルティティの像に拠った。古代エジプト第一八王朝第二〇代王イクナートンの妃で、かつてはミタンニ王国（紀元前二〇〇〇年中葉、北部メソポタミア、シリアに跨って栄えていた国）支配階級は少数のインド・ヨーロッパ系部族の王女で、エジプト王家の嫁いだという説もあったようだが、最近ではエジプト貴族の娘という説が有力らしいから、まあ、近くもないが遠くもない。イメージを精確になぞる伎倆などなかったのだから妥当な線であつたともいえる。

このイメージと造形物との関係がギリシア人の（というか、プラトンの）イデア論の原型である。脳裏にある造形のイメージがイデアであり、その表現された模造が現実物というわけだ。

僕は木塊から粗く胸像を彫りあげた。

粗いとはいっても鼻筋の一度たちあがつてすぐに角度を緩やかにしました言葉に尽くしがたくさまざまな傾斜を持った起伏を寄せ集めながら微妙な肉付き以てを表すラインや、眼窩から頬にかけての丘陵の複合的なぐらみやかすかなへこみの複雑な関係性が示す多義的な形態や、耳の下から顎先へのラインの鋭くも優しいなめらかな繊細さ、それら曲線の喻えられない生命の深刺を表すために入念な木目の見定めやイメージングをおこない、鑿の動きをコンマ一ミリに制すべく、素人に可能な限り息を凝らしたのである。

眼差しのかたちやまぶた、眉毛の表情についてはあきらめた。他にも意に足りない部分ばかり（それしかない）のは当然で、僕は次に粘土で補正した。知り合いからよく踏み締めて空気を抜いた陶土を分けてもらい、像のうえに薄く塗るように延ばし、指で成形しては削り、また足し、精やかにしてふくよかな、若い女性の生命の息吹ともいうべき繊妙なる造形を模することに腐心する。

最初の二ヶ月くらいは瞬く間であつた。

これでかたちはできた、もうよいといいながら直すの繰り返して、一時は五重くらいに

包んで封印し、眼に入る場所におくまいとすら考えた。

なにしろ、巧くいったと思うときは指先が恍惚とする。それでも翌日には気に食わない、もしくはもつとうえがあるように思えてならない。それだもの、逆に逝かんとときには焦燥感と胸苦しさでいてもたってもいられないくらいであった。到底離れられるわけがない。ドラッグ同然であった。

造形完成（一）決意した 日、僕は冷水を浴びて頭を冷やし、もついいんだと自分にいい聞かせた。妥協であるか、壊さぬための絶妙の引き際であるか、これは最低一歩以上の距離をおかないと見極めがたいものである。だが思うようにそれができればなんの苦勞があるものか。可能性としてのかたちは無限にありうるのである。

時刻を見た。午前二時二十分である。僕は二月二十日生まれだった。これを神意であると観じ、さからつては反つて喪う、ということにしてようやく制したのである。

彩色の際には油絵の具を主とし、一部には膠を混ぜた顔料やガラス片なども使った。

保全の意味では問題があつたが、別に百年先に遺すつもりもないので考慮はしない。僕は細毛筆を飽かずいく度もいく度も重ねた。

毛髪にはポスターカラーに浸した新聞紙の細切りと毛糸とを使い、唇には口紅を、睫毛はマネキンの髪の毛、髪飾りとして母親の彫金細工の一部をくすねたものである。

双眸はアテナの最たる部分であろう。『輝く眼の』と形容される女神の晴を構成するた

ラフレズスリ

めに僕が用意したのは螺鈿や屑ダイヤ、青金石や金の小片などであった。僕は放射状の模様を描く晴の虹彩をブリリアント・カットにも負けない燦めきを生もつとするぐらいの意気込みでなんどもやり直し、イメージどおりとはいかなかったが、（やや自画自讃の情が入った）満足を感じられるものを組みあげる。

完成後、一般的な審美の観点からはどうかとしても、僕はあまりの自分好みの美しさに陶酔した。しながらも見つめ続けることはできなかった。それを説明するのはむしろかしい。美は堪えがたいといつてもよかったが、そういうふうでもない気がした。むしろ苛まれるようなある種の脅迫にも思える。全部壊したくさえた。完成などということは不可能なのだ、と自分にいい聞かせても、ならばなぜ完成を求めるか、と自問する。不可能だから。人は未知なるものを常に求めるからか。

だが現実の問題集ではない。解答編は附いていない。えられる答は自分のえられる範囲の答でしかない。

ともかくも距離をおくことだ。それしかない。それはわかっている。わかつてどうにか

なるくらいなら世界に不幸などあるはずがないのだ。僕にできるすべては耐えて時間が解決してくれるまでを待つだけだ。

そしてほんとうに封印し、家の土蔵に隠した。

二日間はどうにか堪えた。三日目をどうにかやり過ごせたかと安堵したその深夜、少年時代には怖くては独りでは入れなかった土蔵に僕は飛び込んだ。手探りで進み、一階にあがる。そこは湿気防止のためにいくらか窓が開けてあり、月が差し込んで下階のような漆黒ではなかった。息を切らせている。喘ぎながら月光を斜めに浴びている手製の梱包をはぐ。

陰翳に富むそれは僕を見つめるようであった。

その眼差しが僕に創られたものでありながら僕を超えて頭上に君臨する女神のように毅然とこちらを見すえている。楽しむように笑み、蔑むように見下ろし、憫れむような移ろいをその瞳に浮かべ、支配することが当然の者のように僕を睥睨している。愚かな人間の惨めな努力をかるらかな黄金の嗤笑で吹き飛ばすパラス・アテナの胸像、それがそこにあった。

その燦然たる天上の笑いの凄絶さ、無垢、驕慢、高貴、自由、あらゆることを無みし、なんと超然たることか。

いったい、人の思惟することなど神にすればなんであろう。いったい、僕らはなにをしているのか。なに一つわかりはしない。いつの間にかこの世にいて敷かれたルールを疾駆するにすぎない。

僕はただ飯を喰っている。ただ電車に乗っている。仕事がある人間は仕事をし、休暇があれば遊び、学生ならば学び、テレビのニュースを観、恋をし、将来を計画し、渋滞に憤り、稼ぎ、会話し、家賃を払い、買い物を楽しむ。いったい、なにをしているのか。だれになにがわかるか。だれになにが約束できるか。なに一つ信じるに足りないし、いずこも安定してはいない。すべてが動揺している。だがどこにいくのかも、どこがあるのかも、どこがなんであるかさえなものにもわからない、たしかさがない。

神々しさに比べれば櫛の樹皮に附いて斑紋をなす地衣類や苔の類のようなものだ。いま考えてもどうにもならない。さつきまでの狂おしい憑かれた感情は去っていた。

汗をぬぐう。

部屋にもどって仮眠し、夜明けとともに慎重に胸像を実際の簞笥のうすに据え置いた。朝食をすまし、マラルメの詩集を開く。

ベッドに身を投げた。

飛び起きて着替える。髭は剃らなかった。櫛も入れない。

材料の仕入れ以外で外出するのは久しぶりだった。晴れていたが、こころは憂愁に囚われていた。アテナ像を見るのが辛かったのだ。だがあてもなく歩いているとじきにもどろたくなる。

あの黄金の呟笑が僕を責め苛む。現実を超越して僕が観た真のアテナを完成させなければならぬ。どうやって？ どうすればそんなことができるのか。僕は神ではない。あのような美を実現できるはずがない。

こんなところをほつつき歩いていてなんになるというのか。

しかしこのまま家に帰ってもなにも進捗しないだろう。なにか新しい曲面をえて進捗させない限り僕は自分に殺される。内奥からわきあがる要請に自壊してしまいそうだ。途方もないそのちからに比べれば僕の存在など藻屑に等しいのだから。

望みはけて叶わないのか。

恐らくはどんなものでも現実にあるのはほんとうに欲しいなにかの代用品でしかないのだ。

人は習慣によつて物や金銭が具体的な欲しい対象だと思つてゐるが、その原型は脳髓の奥底にあつて現実にあるものはその要請を慰める代償でしかない。僕らにとつて真にリアリティのあるものではない。だからアテナは完成しない。永遠に完成しない。蒼穹のよゝに。